シリーズ・農と生きる障害者 11
特定非営利活動法人UNE

障害者も高齢者も、みんなで食べれば、ごはんはうまい

新潟県長岡市の「UNE HAUS」は、
越後の中山間地を舞台に、
里山の仕事づくりを行っている。
米づくり、どぶろく、
最近では宿泊にも乗り出す。
障害者だけでなく、
地元の人たちを巻き込んで
広げていくその原動力は、
「おいしいごはん」にあった。

編集部=文
text by KOTONONE
河野 豊=写真
photograph by Yutaka Kohno

トンネルをくぐって里山の中の民家へ

朝の九時。長岡駅の東口には、一台のマイクロバスが停まっている。その前で立っている男性に、「コトノネさんですか?」と聞かれ、うなずくと、車の中に案内された。

長岡駅前から、車で約二〇分。「UNE HAUS」のある、一之貝集落に行くには、「新榎トンネル」という長いトンネルをくぐっていく。「トンネルのこっち側と向こう側では、気温が違うんですよ。市内では雪が融けているのに、こっちでは積もっている、なんてことも多いんです」。

車が到着したのは、山の中の民家の前。ここが、特定非営利活動法人UNEの「UNE HAUS」だ。出迎えてくれたのは、代表の家老(かろう)洋さん。この建物は、長岡市の「空き家バンク」制度を利用して探してきたという。「もともとこの土地に何か縁があったわけではないんです。たまたま空き家があった、というだけで。でもここに来てよかったと、今では思っています」。

「UNE HAUS」は六年前の二〇一一年にはじまった。それまで長岡市の市議会議員だった家老さんが議員を辞めてまではじめた活動だ。議員時代にも、信濃川の河川敷に農地を借りて、障害者とその家族と一緒に農作業をする活動をしていた。「農作業が終わると、はじめのうちはすぐに解散してたんですけど、そのうち、『ハラが減った』って言って、ごはんをつくるようになって。キャンプみたいな感じで、カレーとか豚汁とかをみんなでつくって食べるようになりました」。「ユニバーサル農園芸えちご(UNE)」と名づけられたその活動が、「UNE HAUS」につながっていくのだが、「ユニバーサル農園芸えちご」の活動は月二回程度、場所も野外だった。「ある時、参加者から『すごくいい取り組みなんだけれど、屋根のあるところでやってほしい』と言われて」。

賛助会員になれば誰でも働ける

「UNE HAUS」にはおよそ五〇人の障害者が登録している。それだけでなく、生活保護受給者、地域の高齢者も登録していて、それぞれ好き

一之貝集落には、棚田が広がる。休耕田も増えているという